明治十九秊初刊

女學雜誌

毎週土曜日發兌

第三百七十九號

要目

傳道上の分勞
名媛百絕
岡山孤兒院を訪ふ
主婦となりし女學生の述懷
近松門左頭をかくべし
小野お通が人となり
橋松佳話
社交改革の森大臣

明治二十七年五月二十日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百七十九號目錄

社說
傳道上の分勞

文しらべ
名媛百絶

雜錄
見出すまゝの記（秋葉子）

叩扉
岡山孤兒院を訪ふ（櫻井生）

開書
主婦となりし女學生の述懐（賤の女）
外形の改良はあと廻しとすべし
機を見度を量りて事物の折衷改良を企てよ
日本風西洋風
夫婦間の相知る事

逸事
竹の操第二枝（枕梧哲士）

徒然草
筆影錄（焦雨生）

小說
美貌（修飾）
義務責任
小兒
野花一輪
橋松佳話（三回）
ゆきあひの橋（花圃女史）

統計
東京の結婚離婚年齡別

書架
近松門左頭をかくべし◎小野お通が人となり◎社交上の改革者としての森大臣

時報
小學女子科の分立○徳島縣の女教師○女子教育の計畫○高知縣の女學○女學と裁縫科○札幌スミス女學校◎アイヌの夫婦○筑紫いそ子○貞婦◎萬國婦人矯風會遊說員◎矯風會員の遠征○千五百の佳人接吻を請ふ○瑞典の女子採用

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百七十九號

明治二十七年五月十二日發兌

社説

傳道上の分労

むかし基督、衆庶の弟子を派遣して傳道せしめんとし、戒しめて曰く、われ爾曹を遣はすは羊を狼の中に入るが如し、故に蛇の如く智く、鴿の如く馴良かれと。傳道は、聖旨を奉じて之を人の心中に入るるものなれば、當に愼しんで其方法を擇ぶべし、苟且にも隨意の談話を爲すと惟ふなかれ。若し慧敏俐潑にして審びらかに其手段を考がえずば、意外にして不測の誤まりを傳ふることあらん。

世話に、基督教會の人を非るよう、耶蘇の男は女らしくなり、女は男らしくなると。眞とに是れ抱腹絶倒すべき悪口ならんが、ひそかに由來を惟んみれば、茲に多少の元因なきにあらじ。

夫れ、基督の道は大道なり。故に、如何なる人種之を行くとも、理想に達すべし。基督の教は圓滿なり。故に、何如なる人種之を奉ずるとも、完全に發育すべし。之を喩ふるに、猶ほ春の如きか、梅は梅の花を開らき、櫻は櫻の花を笑わせ、松は松らしく伸び、竹は竹らしく竹の子を生む。何れか皆な其天性を顯はして、自づからの成長發達を爲すにあらざるべき。基督の敎道斯の如し。左れば、男子之を信じて男らしく、女子之を信じて女らしくならんこそ、當然なれ。もし其極意を言わば、法界に差別なく、男女帝僕農商工軍人詩客などの相違を立てず、一視同仁の態を以て等しく天父の下に並び立たんこと勿論なりと雖ども、此は、社會を離れ、職分を離れ、形骸を離れ、單に靈性一片のものとなりたる時の心持を言ふ耳。もし、反顧して己れ〳〵の形骸にやどり、現に立てる地位に於て、實際世間の職分を思ふときには、帝王は則はち帝王也、故に之を畏るべしと敎ゆ。父母は則はち父母也、故に之を敬まふべしと敎ゆ。軍人は則はち軍人也、故に吾は泰平

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を出さん爲に世に來らずと教ゆ。僕婢は則はち僕婢也、故に汝等主に從がふ如く從へと教ゆ。詩客は則はち詩客也、故に空の鳥を見よ野の百合花を見よと教ゆ。男は、女の冠なり、女は男の從屬者なり、男女別あり、斷じて其分を一つにすべからずとは、明白に聖經中に記載せられたる所ろなり。

此を以て、ゴルドンは、基督を學びて而して勇猛正大の軍人となれり。ナイランゲールは、基督を學びて而して優雅閑淑の女性となれり。基督の教を奉ぜしが故に、男女其性を顚倒するなどは、あらんやうなしと雖ども、若し教の正しきに從がつて、其善を顯はすの方に注意することなくんば、勢ひ如此き誤解を與へんこと免かるべからず。

此の故を以て先づ一事の注意を爲したしと思ふは、凡そ傳道には、男女各自分業して、それ〳〵天稟特徵の方面に向つて力を盡さんこと是れ也。一言すれば、男子は、特に基督教の武德を發揮することを心掛け、女子は、專ぱら其文德を發揮することを心掛けんこと是れ也。文德武德の關係は、物に對し事に依て一々現態を異にするものなれば、玆に明白に其區別を立てんこと固より難し。たゞ常に、此の陰陽剛柔の差別を念頭に置き、何如なる傳道事業にも、篤と文武の分ちを觀じて、事々に男女勞を分つの覺悟を懷かんこと緊要なり。

試みに、一例を擧げんか。戰爭を防がんとする、万國平和の精神は、固より基督教の精神にして亦基督教徒が力を盡すべき所なれども、東方問題あり、對外政略ある今日に際して、もし男子奮發して斯る運動に力を盡さんには、巨多の誤解を惹起して反つて布教を害はんとす。此の如きは、當に女信徒が盡力すべき所ろなりとす。又、我國民に、生命を重んずると及び肉体を大切にするとの教旨を吹込まんには、動物保護の會、死刑廢止の會などを起して、盛んに運動せんこと、必要なるが、之も亦た男子が女性に譲るべきの事業なりとす。之に反し、基督の精神を、遠征、戰爭、改革、植民、進步的態風、其他すべての積極的事業に發揮することは、當に男信徒が擔任すべきものなりとす。

凡そ如此く、男女その長所に向ひ、互ひに傳道上の分勞を爲さんには、圓滿なる基督教の精神、左右に伸達して、其の剛柔文武の教旨もろともに世に顯揚せられんとす。かの傳道上に智慧を要することは、蓋し此邊の消息をや謂ふらん。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文しらべ

名媛百絶（上）

万物外史纂

但馬出石の人、近藤軌四郎君、万物外史と號す。生前曾て、名媛百絶の纂あり。是れ婦女子の風流思想なきを歎じてなり。今玆、卒哭の期、掲げて遺志を公大にす。

五言

唐

題落葉詩　　天寶宮人

舊寵悲秋扇、新恩寄早春、聊題一紅葉、將寄接流人。

池上竹　　張文姬

此君臨此池、枝低水相近、碧色綠波中、日々流不盡。

明月三五夜　　崔鶯々

待月西廂下、迎風戶半開、隔牆花影動、疑是玉人來。

燕足寄夫　　郭紹蘭

我壻去重湖、臨窓泣血書、殷勤憑燕翼、寄與薄情夫。

春望詞　　薛濤

花開不相賞、花落不同悲、欲問相思處、花開花落時。

其二

那堪花滿枝、翻作兩相思、玉箸垂朝鏡、春風知不知。

春閨怨　　李冶

百尺井欄上、數枝桃已紅、念君遼海北、拋妾宋家東。

結素魚貽友人

尺素如殘雪、結爲双鯉魚、欲知心裏事、看取腹中書。

賦金門　　薛瓊

黃鳥翻紅樹、青牛臥綠苔、諸宮歌舞地、輕霧鎖樓臺。

囉嗊曲　　劉采春

不喜秦淮水、憎生江上船、載見夫壻去、經歲又經年。

其二

那年離別日、只道在桐廬、桐廬人不見、今得廣州書。

贈任生　　嵩山女

葛洪亦有婦、王母亦有夫、神仙盡靈匹、君子意何如。

贈李章武　　王氏

河漢已傾斜、神魂欲超越、願郎更回抱、終天從此別。

其二

昔辭懷後會、今別便終天、新悲與舊恨、千古閉重泉。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其三

念子還相思、見環重相憶、願君永持玩、循環無端極。

宋

締盟詩　楊氏女

珠簾半脉月、靑竹瀟林風、何事今宵景、無人解與同。

舟中自嘆　周月仙

自嘆身爲妓、遭淫不敢言、羞皈明月渡、懶上載花船。

梅花　李小雲

素艶明寒雪、淸香任晩風、可憐渾似我、零落北山中。

書窓即事　朱淑眞

花落春無語、春皈鳥自啼、多情是蜂蝶、飛過粉墻西。

元

拂眉　孫蕙蘭

自拂双眉黛、何曾慣得愁、若敎如翠柳、便恐不禁秋。

題明皇並轡圖

三郎沈醉後、上馬玉環隨、如何西幸日、不是並鞍時。

明

題畫　孟淑卿

嶺樹盤雲轉、溪紆路亦斜、晩來烟靄合、無處認山家。

雜詩　許景樊

精金明月光、贈君爲雜佩、不惜棄道傍、莫結新人帶。

相逢行

相逢靑樓下、繋馬門前柳、笑脱錦貂裘、試取新豐酒。

江上　潘氏

江上水正平、日照西江口、遠樹一尺長、岸濶風吹柳。

貧女吟　兪汝冉妻

夜久織未休、戛々鳴寒機、々中一疋練、終作阿誰衣。

戯擬賦汫白裏白、　張引元

鶴氅瑤壇淨、螢飛星漢斜、玉人寒未眠、和月折梨花。

題畫扇胎夫婿

萬玉繞孤亭、聲徹夜泉發、中有遺世人、論詩向明月。

閨情　景翩々

窗前六出花、心與寒風折、不是郎皈遲、郎處無冰雪。

靑溪曲

日乘芙蓉車、七貴相爾汝、妾無吳中人、好就吳儂語。

其二

與歡操夜皈、小妹調箏歇、並坐結同心、引至樓頭月。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

風雨

風雨帶殘春、豈但梨花悶、夢裡萬重山、疊起江南恨。

桃葉歌

儂自喚桃葉、儂貌似桃花、桃花容易落、郎去宿誰家。

贈婢　陸卿子

剪破楚山雲、繪作芙蓉履、有時渡湘江、片片隨秋水。

送范夫人

祖席猶未陳、胡為忽離別、莫遣嶺上雲、飛來掩車轍。

相逢行

白馬驕青雲、金鞭拂紅霧、相逢不識言、各自東西去。

贈麗人　徐媛

弱體不勝秋、無聊支永晝、何處最關情、竹影搖清溜。

大堤曲　王微

盈盈大堤女、灼灼背花立、儂有一心人、誰云不憐德（憐恐隣）

秋夜梁溪道中別御君

此夕風兼雨、孤篷愁正生、那堪君又別、剩我守殘更。

山齋同友坐月

月上桐陰薄、閒堦夜氣清、與君到曉坐、幽思自然生。

病中聽雨

山雨遙侵夜、過春尚作寒、却憐燈火寂、反與病相安。

題姬人畫蘭

借郎畫眉筆、為郎畫紈扇、紈扇置郎懷、開時郎自見。

寄別

乍聞馬首西、潸然無一語、未及與君別、魂迷雲際樹。

和宛叔

昨夜花灼灼、今朝花已落、盛衰自有時、君恩隨厚薄。

偶賦

月落寒流急、風微桐影斜、更堪霜裡雁、飛過少年家。

重晤友夏同泛夾山漾懷永啓

煙外孤帆落、溪邊樹影寒、莫道重逢易、應知重別難。

次友夏韻

臨水酌君別、月寒如此心、淚盡碧溪漲、那知淺與深。

清

雜咏　張凌仙

明鏡如滿月、朝朝弄妝靚、一自棄塵埃、不照孤鸞影。

元日哭先大人　周淑媛

一夜思親淚、天明又復收、恐傷慈母意、暗向枕邊流。

偶成

天外魚書絕、征人豈念家、可憐小兒女、夜夜看燈花。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜　錄

見出すまゝの記

上州中川の里　秋葉子

南書院の軒端に沿ふて、紫きの色ぞしたゝる藤棚に、ふりかゝる雨のしと〳〵と、小止みもなき春の末の日。何樂しむべきすべもなきに、虫のはむまゝにまかせ置し、古文庫の底より、昔しのをみながたしなみ本。一二冊かいさぐりて繙けば、見出すふし〳〵左の如くなむ。

○子を敎るの道心の明德を明らかにしてあしき道にいらざるやうに敎ゆへき事

○おさなき時は言葉をもつて敎さとすのみにては聞うくる事なしそしえずとも父母めのとの心ざしを自然と見習ふ物なれば父母行義よく正しければ子は敎ずして正しく成ぬべき事

○先ツ女の勤べき作法は朝毎に寐間にて髮に櫛を入れ起き出て手あらひ口漱ぎ髮を撫つけ衣服を改むべき事

○白粉は唐土にては殷の紂王造りはじむ本朝にては人皇四拾壹代持統天皇の御宇親成といふ人造り出せり夫おしろいは伊達風俗をかざる爲にあらず女の禮儀にして祝義の物なる故に愁の時は白粉はせぬを禮儀とする之然れども祝儀なりとて白粉を厚くしたるは又見苦之淸少納言が詞にて白きものゝゆきつかぬは庭に雪のむらきへたる心地して見苦と書たり唯かくし化粧の色みせてそれかあらぬかほの〳〵と見ゆるやうにし給ふべしおしろいをあつくするは遊女の事ならんかし

○白無垢をあらふには豆腐の湯をわかし赤小豆の粉を入れあらふべし又大根の絞り汁にて洗もよし

○染の付たるには白砂糖に水すこしいれせんじ冷してあらふべし又味噌汁にて洗ひてもよく落るものなり

○雨水のかゝり際づきたるは海蘿を焚とらかしもみ付あらふべし跡なくおちるなり

○女の身として常に忘れまじき事十あり第一に我身（わが身を忘るゝ人世に多し我身へはよからぬ事をなしさがなき物いひをしあしく人に云はるゝは我身死しても悪名は末の世に残るをしらずよしなきことのみをなすはこれ我身を知らざる也）第弐貞女の心第三夫の制第四孝行第五病（これもつゝしますして起ること多し）第六貧かりし時の事第七人の情第八慈悲の道第九嬉かりし時の事

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第十年のよりたる事

○産後よからぬ一、食物、なすび一、うり一、わらび一、たで一、そば一、こんにやく一、なし一、こせう一、とうがらしすべてからきもの一、くさきもの一、こんぶ一、木のこ一、めんるい一、くだもの一、あぶらけ一、なまなるひへたるもの一、酢の氣あるもの

○産後よろしき物、一、かゆ一、すは一、こい一、かき一、とびうを一、からざけ一、なまず一、うなぎ一、たまご一、鯛の一夜鹽

○我に誠ありて直なればもろ〳〵の人みな我兄弟のごとく親し我心正しからず僻ば兄弟親子の中も怨敵のごとく人おほく遣ふといへども獨りくらすに似たりよく心得こゝろを正しく直にもつべき事

○人を召し仕ふに愛らしく惠み深く下たる人のくるしみを知りて情をかけてめしつかふべしされども打解こゝろはゆるすべからず

○わきがの藥、たんはん五分はらや一匁以上貳味一所にあはしぬりつくべし三日程づゝ間を置て又ぬるべし三十日を經てたいきこと〳〵くさる

○口中はれいたむには生茄子の皮を黒焼にし砂糖蜜にてよくぬり合せふくむべししばらくの内にいたみもさりはれもひく事妙之惣じて齒くきのはれ口中一切にも用て妙なり生茄子のなきときは茄子の蔕をもちゆ

○夫女子の匂袋をもつとは色香をもとめんが爲にはあらず女は不淨のふかきものなれば清淨にして佛神の御加護にあづかり奉らんが爲なり然るを身の分限をかえり見ず名香伽羅を焚とむる事其身の分限にしたがふべし匂袋の方は。青葉。甘松。丁子。　分擅各等分茴香。　三藥を少しづゝくはへてよし此方はやごとなき御家にて梅の下風といふ匂袋なり又たにほひの甚しきを好給はゞ麝香。龍腦をくはへてよし

○髮は所々の風俗年の老と若きとにて其ほど〳〵あれば夫に隨ひて葉手なるゆひやう有まじ殊更人の妻たらん女の年にこえて後家などの風又は元結なしに賤きさまなどすまじき事

○朝ははやく起召つかふものにも寢起を見せざるやうにたしなむべき事

○夜くらき方に居べからざる事」

○進物數の書樣。小袖呉服一重、單物　かたびら羽織袷布子夜着肌着ふくさ此類すべて一ッといふなり頭巾ひとかしら、蚊

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

幌一張、綾錦、金襴、鈍子、紗綾、繻珍、綸子、縮緬、眞綿、羅紗此るい皆一まきと書く、元桁一架、屏風一双、たん笥一ツ、長持一棹、几帳一基、簾一張、掛物一幅、筆一管、硯一面、冠一條、びわ一面、笄一筋、てうし一提、盃一とくち、碁一面、其外くさ〴〵

○切疵血止には生紫ふ蘇をもみて切口へはれば血もとまり痛もやみ其まゝ皮づくりて癒るなり薬種屋にて紫蘇の粉をもとめてたしなみおくべし其粉をふりかくれば其粉皮となりて癒るとめうなり

○總て諸藝たしなみ覺る事は身の分限によるとはいひながら下賤身なりともその藝のとをわきまへ知るぶんは苦しからずたとへば三味線は彈ずとも本は胴末は海老尾いとまきは天柱いとのあるところは糸倉いとを結ふものは根緒かける所は根緒懸どうにかふせる物は胴掛いとをのせるものは駒糸の末にはさむ物は上駒いとの一は乙三は甲二は呂ならすものをば撥てうしを合せて彈を調るといふ三味せんを習はずしてかやうに知るとはたゞ常の心がけにあり其道々を知りたる人々問聞時は何事にもせよしれぬといふことはあるまじ問は當座の恥のやうなれとも問ずに居て一生しらずにしまへば末代までの恥なりとおもひ給へば心懸次第にて覺へらるゝものなり

○女子の見給ふべき書。女四書。姫かゞみ。列女傳。婦人壽草。小兒養育草。養生訓。老人やしない草。女小學。女大學。女庭訓。女今川。袖珍かな遣。女敎小倉色紙 大册一百人一首なり。古今和歌集。後撰集。拾遺和歌集 右を三代集といふ。後拾遺集。金葉集。詞花集。千載集。新古今集 共に八代集也。此外十三代集合せて二十一代集といふ其外。伊勢物語。源氏物語。狹衣。清小納言枕草紙。うつぼ物語。竹取物語 其外物語日記類數多し

○裁縫の事たとへ上﨟なりとも習ひ給ふべしおもと人などにいひ付給ふともしらずしては思ふやうにとゝのひがたし針の名をも覺へ給ふべし眞綿をつみ麻いとをうむ事も習ふべしこれも習はんよりなれよといふ諺のごとく常に手にふれてなるればおのづから上手になるなり

○それ歌は我國の神道にして心かけなくては叶はぬ道なり先心を正直にして眞實を守ると第一なり心きよければ歌のすがた貴とく心にごるときは歌のさまいやしいかほどたくみに讀みいでんとおもへども心すなほならざれば自然と歌の本心わ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

らはれてつたなしまことにはづかしきとなりまづ歌をよまんとおもはゞよき師をもとむべし和歌に志ありといへども人に見することをはづるはひがごとなりいかに器量の人なりとも始より得たるはなしはづるにたらざることなり代々の撰集を見て古歌を多くおぼへそののち何にても題をさぐりもとめ心にうかぶを口にまかせてつらねいく度も〳〵功者の人にみせて添削をうくべきなり

見出づる程のことを書き去りつゝ、靜かに起ちて窓をひらけばいつしか日は暮れ、雨はやみて、朧氣なる春の月は、さ霧のうちにさし昇りて、身は、明治の御代を、夢みるものゝ如くありけり。

廿七年五月二日夜しるす

或人よめる、

共に見ん櫻の花は散はてゝ
　若葉は繁る時となりけり。
まかせたる苗代水はよどむとも
　我はひかまじ君がまに〳〵。

叩扉

岡山孤兒院を訪ふ（第一）

櫻井生

備前の國岡山の地に世界の一大奇觀あり、上帝の御手の奇しき業の明に行はれつゝある處あり。何ぞや、是れかの信仰の人石井十次君が靖献殉己の熱誠によりて、支持せらるゝ岡山孤兒院なるもの之なり。

孤兒院は岡山東山の麓に在り、禪宗三友寺の本堂を中央として、周圍に點々個々十有餘棟の建物、一千餘坪の地面を有す。三友寺の本堂は、同院が以て禮拜堂、教場及び事務所に宛つる處なり。該寺は當時殆んど荒廢に歸し、住職もなけれども、佛像位牌の如きは尙ほ孤兒院禮拜堂の右手の障子の陰に幽閉せられありて、時には爰に僧侶の來ることありて、讀經木魚の聲の、讃美祈禱の聲と混ずるとの奇觀を呈することもありといへり。周圍の建物は、孤兒の宿處、活版部、理髮部、製莚

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

部、感化院等に宛つるものにして、大工學校も當時建築せられつゝあり。而して現在同院内にある孤兒は六歳以上十八歳に至るまで男女共に二百六十三名、其他に役者廿五名、其家族四名、感化院に在る出獄者九名、以上を合すれば、孤兒院内に起居せる人員は三百有一名の多きを算し、一ヶ月の經費は六百圓を超加す、此二百六十餘名の孤兒を敎育保養するの道、六百有余圓の月費を支出する處は、何處なりや。此孤兒院の爲には、其費用を支辨すべき財産は毫厘だにあることなし、只石井氏が胸間一片の熱情至誠は、此孤兒院の財産となり、生命となり、氏が無告の孤兒を救濟せんが爲に灑ぐ熱淚は數千万人を惠澤に浴せしめて、尚余力あるなり。

○孤兒の狀態

行て孤兒院を見れば、夥多の男女孤兒は、彼處此處に散在して、或は職業に餘念なきあり、或は隨意氣儘に群集嬉遊せるあり、彼等は皆石井氏を父とよび、氏もまた彼等を以て、皆子と分つとなし。予氏の案内につれて、院内を巡觀するに、曾ては乳なく、食なく、凍餓に苦しみ、骨と皮とに痩せ衰へたらんも、今は慈悲深き人を父として、凍餓の虞もなく、身躰も肥滿し、赤らなる豊頰に健康無病を顯せる孤兒等の親睦和合して、睦々の狀ある、其いぢらしさ、言葉にも筆にも及び難く、仁心義膽の士女をして、之を見せしめなば、慈悲の涙の一滴を制すると能はざらんと共に、之を養育する石井氏の實に未賴母しさをば羨まん。氏は自から此大幸福を喜ぶと甚し。予の目擊したるものゝ中に、七八歳と思しき數名の孤兒の入浴せるありき。彼等の三四は睦し氣に混浴して、諧樂談笑しつゝあり、一人は桶外に在りて、火を燃し居たりき。かゝる諧和の狀、蓋し他に見る能はざる處ならんか。孤兒等は決して互に爭をなすとなしといふ。之れなは互に骨肉ならぬ身に用捨する處のあればならん。氏は孤兒等が用捨の思ひをつとめて除かんとせり。人あり氏にむかひて孤兒等が柔和なるを賞美するとあれば、氏は却て之を喜びとせずして、憂となし、而是、腕白盛りの者に氣兼用捨などの念ありては、天然の發育を害すると少々ならず、殊に既に性を害せられたる孤兒等には、務めて此等を除かんとを必要なりとすといへり。故に氏は孤兒に行儀作法を強ひず、予等の如き來客あり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

と雖も、彼等は關せざるなり。

孤兒の年長者は自然に年少者の監督を以て自から任じ、成べく役者の手を煩はさゞらんことを務む、當年十八歳なる二人の女子の如きは、各二十名宛の女兒を引受けて、母となり、姉となりて、石井氏に報ぜんと務め、自からかく教育せらればよかりしと思へる處を以て彼等を保育せんと志せり。故に當時は婦人役者の幾分を減ずるを得たりとか。彼二人の女子を見たるに、二人ながら、柔和溫良なると、其顏色に顯はれ、良家の女といふも何に耻しからぬ風采ありと思ひぬ。

石井氏の孤兒を教育するや、氏は平素大に懷抱する處の教育主義ありて、當代の小學校教育を是とせず、殊に之を孤兒の如く、發育に幾分の曲否あるものに施すを宜しからずとして、十一歳以下の孤兒には一切智育を施さず、職業をも執らしめず、終日遊戯三昧に餘念なからしめ、十一歳に達すれば、始めて讀書、算術、習字等を敎へ、又少しく長ぜば、實業に從事せしむ。又中に學問に熱心なるものあらば、擇んで高等の教育を受けしむに躊躇せず、既に同院より出でゝ、同志社及び順正女學校に在るものありといふ。多望なるかな、該院の教育や、かゝる處にあらずんば、教育の改革の旗は擧ぐるとを得ず。予石井氏に勸むるに、氏が日夜に接する多數の孤兒を以て、小兒なるものゝ研究をなし、教育上に一大改革を起さんことを志さんことを以てなり。氏も既に此志あり、且人相學の必要を感じて、既に數年之を研究し、稍會得する處ありといふ。

○孤兒の將來、石井氏の希望

孤兒の今日を養育するとも、もし彼等が將來の爲にも企圖する處なくんば、彼等はまた無告處の境遇に沈淪するとなきに非ず、故に石井氏は孤兒に實業を授け、活版に、製莚に、理髮に、大工に將來孤兒等が獨立自活するに足るべき職業を敎ふ、自活の道は彼等に敎ふべき最大要務なり、されば石井氏は實業に從事するものをして、今日もなほ自給の方法に居らしむ。

氏が殊に孤兒に向つて希望する處は、健全なる農國民を養成せんとするに在り。日向の地に六十町計の原野は備はりて、孤兒等の來りて、開墾するを俟てり、十數日以前には、十五

歳以上の孤兒廿五名は、第一期移住隊として、彼處に赴きたりといひ、第二期の移住隊も遠からざる中に出發すべしとかきく。此原野を以て孤兒の村落を作り、彼等が廿歳以上に至らば、孤兒院内の孤女と結婚せしめて、各一家を成さしめ、其家に於て、彼等と運命を同うせる孤兒を養育せしめんことは、石井氏が計畫なり。かくの如きに至らば、孤兒院は、或は孤兒救濟事務所の如きものとなるにいたらんと。氏はいはく、日向の國は大に開墾すべき原野數里に亘れりと雖も、なほもしそれにて足らずんば、北海道にも移住せしむべし、南米國にも殖民せしむべしと。又農業移住隊のみならず、活版部移住隊の如きものをも組成して、東京に移住せしめ、爰に活版事業に從事せしむるにも至るべしと。嗚呼偉みあるかな、この孤兒院、この内よりして、不羈獨立の民を生ずべく、健全なる實業國民は生ぜん。

孤雲獨去閒
半窓梅影月

閑書

主婦となりし女學生の述懐（完）

服の女

外形の改良はあと廻しにすべし、

先頃服裝改良論頻りに起り候て、中以上の婦人方はそれが爲非常に御奔走御盡力相なり、中にはいとゞ豐かならぬ世計を一際不如意にせらるゝまで時勢に後れじとて御騷ぎ遊ばせしが、今になりては折角の御苦心も水の泡と消え、實に申すも御氣の毒のことに御座候。これといふも數百年の仕來りを一朝に改め候ことの六ケ敷き證據にて、重要なる問題に關係ある件は別物にいたし、衛生上の利害さへ議論中の此一條などはズットあとにするが得策と存候。而して家屋の構造、並びに社會の交際のことにまで影響を及ぼすほどの面倒さへ有之候ものを――小女などは西洋服拵へる徒費丈は辛ふじ

て免れ候もの、家を持ち始め、これこそ便利の骨頂と思ひて購ひ候道具の中には、全く不用に歸し候ものはなくとも万事万端釣合はぬ爲に邪魔半分室内に默許いたし候もの一ッ已に御座なく候。たとへば子供の寢臺など日本流の家には思の外不便に御座候、寢臺には椅子も卓も附物なるが故に候。其他ストーブの面白からぬは啻に坐敷の風流を害し候已ならず、鐵瓶さへ掛られず、炙物の間にも合はぬ火は中以上の世計は知らず、少女風情の家には得たえぬ不經濟に有之候。就ては身のうつけを御披露いたし候樣にて甚だ御恥しくは候へども、炭酸瓦斯發生の故をもつて殊の外卑め候ひし普通の火鉢は近頃に至りて、あれほど工夫効用の夥しきものは見ずと思ふほどに感心いたす樣相成候。されど、舊習なりとて万事これに拘泥するは申すまでもなく愚かしき限りにて、

機を見、度を量りて事物の折衷改良を企つるは少女等の義務

と存じ候。固より家の人一同に謀りて、其賛成協力は是非とも得ねば成効いたすま敷候。たとへば食事就寢の時間を定むることなど制限を置きて茶菓の通ひを幾分か減じ、徒費徒勞を追々省く樣のことなどさほど難からずして便益ある改良の端緒かと存候。尤も著しく不便不快なることは追つては廢せらる可ことなれど、そを幾分か促し候て社會の公益を謀る志ある人々は、同好組合樣のものを建設致し候ても宜しからんと考へ候。如何のものにや。

日本流の家西洋流の家

日本流の家は万事共同的にて、西洋流の家は個人的とも申す可か。從來日本流に嫁づき候ものは夫に嫁づくといふよりは寧ろ、夫なる人が代表する其家族に嫁入ることにて候ひき。それ故、たとひ夫に對して節を欠かざる妻も、或は繼嗣を産まず、或は家風に合ざれば正當に離婚せらるゝ例しも出來候譯ならん。西洋にては家の息子妻を娶り候當日より父母と同居するとせざることに關はらず、夫

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

婦両々既に獨立獨行の一家族と見做され父母は其日限り干渉の權理を捨候こと故、此邊日本流、君父政躰の下に數多の小家族雜居せる風俗を存じ候ものと大に趣向を異にいたし候樣考へ候。現今の時勢にて、たとひ西洋主義の新夫婦は相互ひの間には如何なる内約有れども、万事新舊原素を混淆せる社會なれば、他家へ嫁入る婦人は此の邊の道理を篤と辨まへでは叶はぬことと思付候。否されば、良人に對する要求の度合も過る可く、随つて失望悲嘆にも陥り申すべく、家内に思ひ設けぬ風波軋轢をも生ずべく候、今の世に別居論を主張すると已をならひて、こゝらの斟酌勤愼を心得ぬ新婦はどうたてきものは無之。斯の如き場合に立ちて適宜に所理する仕方を教へぬ教育法も甚だ迷惑とこそ考へ申候。矢張り此件に連り候事柄にて、新教育受たる夫人が不評判をとりたる已ならず、良人の面目さへしたゝかに損じ候は、

の件に御座候。例の君父政事の遺習として、親戚間の交際は西洋に比して强ち親密とは申されねど、頻繁なること實に非常なる相違と存候。一方より考へ候へば、甚だ美しき習はせなる代りに一方には隨分互に面倒も有之候こと據なき議に候、緊要ならざることにまで相談の會議を要すると、祝儀不祝儀に遠方まで使を送るなど省くが互の便利なる仕來りは有之候はんが、これ等は新婦が着手すべき改良には非ざること明白なれば、薄きに失せんよりは厚きに失せん方遙かに得策と悟り申候。婚姻は分勞なりとのことを眞理とせば、親族交際は主も夫人の受持とせねばならぬことに御座候。いざこれよりとて理想的ホームの組立を企圖さるゝ新婦にして第一着に親族のおもわくを害し、良人に恥かゝするが如きことにては、實にいひ甲斐なきことに候はん。我ホームを源として博愛、慈善、改良などの清淨なる流れを普ねく世の砂漠に漑ぎかけんと祈るものが直ちに我家に連なる人々の信用を欠きて如何で

感化力を他に及ぼすの技倆を畜はへ候べき。これらの道理も余程念入れに敎へて頂かでは女學生將來の不幸思ひ遣るだに哀れに御座候。

夫妻間の人情

命令的强迫的の婚姻はいざ知らず、幸にして相撰ぶの特權を許されて一躰となりたる者は互に盡す可き義務など講釋は聞ずとも、殊さらそを遂げ了するとに勉めずとも、湧き出づるが如き相愛は万事を指南して聊さか不足はなきとと己思ひ候とは以ての外なる謬見と今さら發見いたし申候。互に相親しむと、氣の置けぬと、知りもし知られもしたりと安心するとなどが却つて、遂には互の間の吾儘ともなり、不人情ともなりて、知らず識らずの中に互の敬愛を減じ候樣の例し決して無しとは申されずと心付候。"Charity begins at home" と申と有之候が、家族の中にては夫妻間に始まり候かと考へられ候。

まだ〳〵色々申上度經驗も、聞いて頂き度き喞言も有之、殊に下婢敎育、子供に對する心得などに付ても聊か申上度と殘り居候へども、余り長く相成候へば一先づ筆を止め申候。覺束なきすさびも淺學、淺識なる小女が心一片の誠に免じて咎め玉はず、御一讀の光榮たまはらば、此上の面目は候はず

あなかしこ

二白世話女房たる小女が坐右の銘ともして珍重いたし候金玉の言葉わずかと左に認め御目にかけ候。

"Every duty, even the least duty, involves the whole principle of abedience. And little duties make the avill *dutiful*, that is supple and prompt to abey. Little abediences lead into great. The daily round of duty is full of probation and of discipline; it trains the will, heart and conscience. We need not to be prophets or apostles. The commonest life may be full of perfection. The duties of home are a discipline for the ministries of heaven."

H. E. Manning

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

逸事

竹の操

第二枝　從六位　枕岳哲士

初て小學校に入り側ら關村季子女に附て琴三味線洋琴等を習ふに天賦の聰敏なる質に驚く許りにて實や栴檀は二つ葉より香ばしく虎狼は三才より人を噬むとかや一を聞て十を知るの俊智季子女も舌を卷きしとか此年の冬季温修會に琴にて六段菅垣玉川を奏せしに音聲の清雅なる爪先の練妙なると或は合し或は流れそゞろに内外をして嘆賞せしめたりと。

已にして高等全科を終へしは明治二十二年の六月にして女史十四年の時なりとす是より先き學校及び音樂の側ら西京儒者堀尾謙員氏に就て漢學を修め此時已に五經左傳を講ずるに容易なりし女子十四才にしく如斯なるは蓋し稀なり。

猶も漢學を研究し音樂裁縫に心を練りつゝ側ら家政を親裁するに至りぬ。

女史は如斯才智に富みたるが上に眞に美人たるの天爵を賦ふしたり潔麗瀟洒にして羞月閉花の美貌は沈魚落雁とや評すべく小野小町にも勝るらん清緻玲瓏たる肌へは月光氷雪にや譬ふ可く衣通姫も如斯やあらんと思われて中々に世に有りがちなる美人にはあらざりけり。

左ればこそ二七の妙齡に達する頃より貴紳豪富より縁談の望最と多かりけるがお光姿も非凡の令孃なれは何卒して天晴れの公達に嫁せしめんとて一々閲糾し折々女史の耳にも容るゝを女史が夫定に注意したることそは嘆賞すべき一事にして社會婦人の模範たる可きものなりけり百萬の豪富も勅奏の榮位も女史の耳朶を刺戟する能はず其夫たる人の性質に探偵の全力を盡したるは女丈夫の特性にして浪花拜金崇名の社會に在て蓋し比類なき美風なりけり。

明治二十三年の頃に至て女史は國史を修め度き念起り良き師もがなとて光を以て大阪師範學校長師子島時中氏に計りたるに氏はよしく予は良き師夫を媒ち參らすべしとて靑谷龜壽郎氏に結婚の事を勸めたりしが女史の親友塚櫻こよし娘は龜壽郎氏とは從兄弟の間柄とて宜しなに執成し遂に婉華たる黃鸝の初音翠苑に響きて明治二十三年七月十八日女史は十五

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

年四ヶ月にしてミセス青谷とはなられけり。
妹脊の情日々に濃く偕老の契り中々に淺からざりしが遂に井戸左大臣の胤は女史の身に姙りぬ仝年十二月弟耳規死してけり此哀に引かへて明治二十四年六月に玉の如き男子恐き敏達天皇の皇孫五十二代の嫡裔と聞へし青谷瑩太郎てふは生れ出で玉ひけり穴愛度き事の限りになんありけり。
然るに世は憂き世とは能くぞ云ひし女史は產後の惱みに非常に苦しみしが命數の盡きたるにや在りけん非凡の賢女にも天の助くる所非ざりけん浪花婦人社會の龜鑑として花も實もある賢女は栴檀一陣の煙と爲り果たりけり悲哀なる唱歌の聲と消へ失せたりけり穴悲し穴殘惜し眞に女德養成上の標準として殘さま欲しきは……………草葉の蔭の橘映子賢女よ……………
平常の姓行志想若し下等社會にて在りたらんには公に聞へて直に官の褒賞をも受可かりしを深窓の貴女故に美德幌裡に埋れて左はなかりしかど其言行の男々しく感ず可かりしは高津士女の胸裏に印して長く忘れざる所一々婦人塲裡の摸範となる可きものぞかし聞きし事の確なるを而已筆記しなん。
嗚呼次回よりの記事こそは本欄の眼目にして竹操の色香郁々として紙上に溢れ世の生意氣女子亂行汚女の顏に照々たらん

つれ〴〵草

筆影錄（第一）

蕉雨生

○美貌脩飾

眞の美は娥眉に非ず、細腰にも非ず。美貌といひ、醜容といふ、其間僅に數年の差あるのみ。秋天肅殺の日には、菫も薊も何の分つ處なきが如く、人生の秋は美醜のけぢめを抹殺し了す。かの面色の美をたのむの女子は禍なるかな。彼等は之が爲に眩惑せられ、其靈魂は爲に爛醉し、外面の美色に誇りて、內心極めて醜なり。電眼の士は、彼等の徒に於て、其色白き皮膚の下より漏洩し出でんとする穢汚あるを見る。憐むべきかな、かの美貌に矜るの女子、美色は永遠に己より出でざるものゝ如く思ひ、尤も甚しく其容色に迷ふものは、かの愚なる情人に非ずして、己れ自身なり。外より迷ふものは、時と共に醒むるといへども、自から迷ふものは、時と共にい

よく〳〵迷ふ。

羅綾の衣、紅脂の粧、敢て眞の美に於て益する處なし。眞美の摸型とも稱すべき、天の使の畫像には、繽紛たる羅綺なく、暐曄たる丹青なし。たゞ灑洒清楚たる白衣輕く纒いて、其高潔玲瓏たるときはみなし。希臘、羅馬の女像は單白簡潔なる装を以て尊く、美人は多く粉飾を加へざる時に於て尤も美なり。靚粧冶容は醜の醜なるものか。賁飾を凝して、始めて靡艶なる如きは、其者質は醜悪なるなり。白木造の建物の用材は、丹青のペンキを塗りたる家屋の用材よりも、其本質遥に優等なり。清楚簡潔の度を過ぎたる修飾は、嘔吐を促すといふべきか。

眞の美は心の美なり。貌の美は久しからずして、秋風蕭殺の天に遭ひて、凋落の悲みあり。心の美は春風常に駘蕩として、花は不斷に紅に、柳は永遠に綠なり。其美は皮膚をも通じて外面に現じ、醜容の人も之によりて、かの所謂皮一枚の美婦よりも遥に婉しくして、眞に美なると、彼の哀駘它の如し。眞の修飾は、心の修飾なり。よく心の修飾をなすものは、身心日夜によく理ひて、垢穢を染めず、亂れたる處なくて、に端正閑雅なり。

○義務責任

年たちかへり、東風今日吹きそめしに、村消の雪間かきわけ萌え出づる若菜なりけり。

春風やゝ己が去年の枯葉に音づるゝものから、いざみどりにいづべきときは來りぬと、まだかたく氷れるひぢわけて、そと芽ぐみいでつゝ、あたりをながむれば、春立ちしとはいへ、野も岡も冬枯のまゝにて、綠の色はわづかに、常盤の梢にのみ殘り、あたりは野さへやゝ村消えたるばかりに、筧の水も、小河の流れも、こほれるまゝに、音なし。己が若綠の芽さへも、半ばまた黄ばみ渡りぬ。

若菜つら〳〵おもふやう、かく萌出づるみどりの半はかれつゝ行くなれども、はや春立ちし今日この頃、おのれかゝるさまながらに萌え出でずば、よの草木も、また人々も、いかで空かはりゆくよを知らん。さらばうきなやみにも耐へて、我務め丈を盡さん。春來にけりと若菜にしらすこそ、我がつとめなるぞかし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

かくて若菜は春の初の寒空の、村消えの雪間に、なか〳〵のうきめの中に、たへ忍びつゝ萠え出でゝ、葉もしげりまさりゆき、花さへさきぬ。雪も氷も今は跡なく消えつ、此若菜の萠えたるものから、よの草はわれも〳〵と、ひぢわけ出でゝ野邊はいつしかまたく緑となり、木々の梢もおもかはりして、柳は緑に、花は紅となりぬ。さて木の間づたひに、さへづる鳥の聲きけば、世はおしなべて花さく彌生の春になりぬとはいふなり。

○小兒

予性甚だ小兒を愛す。胸中の不平鬱するに由なく、煩悩焦慮に苦悶する時、一たびかの無邪氣なる嬰兒の乳臭き童顔に接せば、千慮万慮も乍ち雲消霧散して、心裡の淸々しさ、金風誘ふ雨後の月明にもにたり。邪念妄想、靈魂を腐蝕せんとするとき、予が爲に之を拯ふものは、天地の間に在りて罪てふもの丶あるを知らぬ嬰兒にぞある。小兒は人間界の天使なり。彼等は死あるを知らず、罪悪の念あることなし。小兒は美妙の粹なり、淸楚閑雅なるもの丶首なり。小兒あるによりて、夫婦間の愛情は周密を加へ、家庭の不和は愈さる。彼等の罪なき微笑は、獰猛の兇徒が良心を喚醒し、其無念無想の動作は大人に敎ふるに道を以てす。彼等は寔に大人の師表といふべき哉。

キリスト一代記の畫圖中に於て、予をして尤も高尚神聖の思ひあらしむるものは、主が多くの嬰兒を膝下に集めて愛で給ふの圖なり。キリストは之れ小兒の大なる人物といふべきか。眞の偉大人は小兒の心を有てる者なり。かの僞善といひ、罪悪といふ、皆嬰兒の精神を忘却するによりて起れり。大主其弟子を戒めてのたまはく、爾曹嬰兒の如くならずは、天國に入るよ能はずと。此詁の意義や、實に微妙深遠なりといふべし。孟子もまたいへり、大人は其赤子の心を失はざるものなりと。

○野花一輪

野花一輪、小觀すれば春風に咲いてかつ散り、野夫の鋭鎌に刈り取られて、牛馬の喰ふ處となるものといふより外なきも之を大觀すれば、天地間の大眞理、大微妙を、其一瓣一蕋の

間に罩みたりと覺ゆ。其來るや宇宙の眞理を語らんが爲、神の榮光を顯せんが爲なり。野花一輪心なきに似て、其心深し主イエス眞理を宣ぶるに當り、弟子に告げて曰く、爾曹野の百合を見よと。野花是れ姿に於て可憐なり。されど其咲くやたゞに姿の爲に非ずして、また心の爲なるを、知る人稀れに野花ために嘆じてかく歌ふ。

心から、にほへるものを、世の人の、
すかたの花と、見てやすぎなん。

小説

橋松佳話

三回

ゆきあひの橋

花圃女史

身は僻地の土民より只々われとわが力にてきたへあげたる橋本庄太、久方の天津へ思ひ立し材木其他の貿易事業、初度の失敗は再度の經驗と、行かひ年經るうちに利益追々に加は

りて、某とかずまへらるゝ紳士の仲間入を、われよりとはなくていつかしにけり、されども昔忘れぬ綿服に、人力をたのまず、晝夜働らき奔走するに、隨ふ兵卒なく、伊豆其の他に會社をたてゝ久野を監督としいよ／＼この事業を盛になしぬ今はと橋本とわれから心にゆるして、淸國よりめづらしき品々買とゝのへし歸途突然に松田伯を音信るれば、くちをしくも一月斗以前、伯は死去してしめやかなる家のさまの心細き折に、音つれしさへあるに、めづらしやとて、當主堯行のよろこび一方ならず、生前に面會されぬは、くやしけれど、病中のつれ／＼新聞になぐさめられし雜報にも折々君の事のみゆるを、ことによろこびほめもの、第一には、必ず君の名をのたまひき、恩にきするやうにおもはれては心外なれど、砂の中の眞玉と見出し我眼力の違はざりしを、人にこそいはね、心の中にはいつもわれとわれをほむるもうれしき限なり、今は昔の橋本ならねど、心好ひは失がたきものよ、禮なきは隔なき故とゆるして、心長くとゝに遊べ、あまり金の事に手氣をもむと金のやうに身の中が氷るぞ、と其上は橋本とつゝる筋、ふり分がみなりし妹の操子、高島田に結上げてしとやかな

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

るなりふりの、しかもひたはぢにはぢもあへず愛敬づきてゆかしきさまなるに、茶の手前無造作に所望して風流三昧なる家のさまなり、橋本華族社會の安逸なるに、今迄のわれをくらべて、たつもゐるもゝじりの靜心なかりし心春風に吹とかれしやうにのどかになり、今は某省の小吏となれる今村久とも行かひて淋しきこの松野家を賑はせけり、堯行と二人して或日散歩の歸途、見出し駿河臺の邸、賣物となりしを買取て、こゝに橋本萬代の基礎をかためんといふ、堯行もかれこれ心づけて、遂には八雲立いづも八重垣にと、操子と橋本の心底見ぬきて、不釣合をいひてたゆたふ橋本にもわれ一人責をおひて得心させぬ、松野後室は年よりの習ひとて、昔の事のみいひて士民の子いづれの者ともしれぬ者にと歎きたまへど、堯行の勢にけおされて、下に思をくるしめたれど、事は次第〳〵にはかどりて、假に婚禮の式をあげ、いつ迄も遊びてはあられぬ橋本なれど、操子も心にかくる我素性を探りかた〳〵生地とうろおぼえの八丈島へ行かんといふ、操子も今更はなれかたき心地に雄々しき心のともにと乞ふを、堯行これ又おもしろしとそゝのかしてホネムーンかた〳〵出立させんとす、後室あまりとおもへど、とゞむるもさすがにて、宗平といふ譜代の家來供にして萬事心づけよといひふくめ涙がちなるも理なり橋本の會社の人々松田の同族は橋本をさげすみて一人もこねど、小田原にしり合の公達四五人、堯行とゝもに横濱まで送れば新夫婦手をとりかはし甲板にふる半ケチ白き鳥の目を掠めて過るにまがへて、煙の中に船も姿をかくしける。

世の中に樂しといふこと何ならん、花も、紅葉も、月も、雪も、たゞ一人の世なりせば、みんにもかひあらじを、人といふ和合せんものあればこそ、うるはしき花も一しほにうるはしく、のどけき月も一入にのどけくぞあるべきを、橋本おさなきより親をしらず、兄弟をしらず、血をわかたれしもの、およそ世界にありといふことしらで人となり、子にあまき親、おやにあまゆる子を見ても、不思議にも、をかしきやうにて無用のとのとあざけりしも、漸ものごゝろつくやうになりて鳥獸にも親子夫婦の睦あり、これにより、なぐさめられ、これにより心もやはらぐものなどおもへば、なつかしき故郷、こひしき親、今は一生の友これにより世路の憂苦も共に手を

ひかれ、助けはげまされぬべき妻をさへ得て、袂つらねてなほ戀しき親の御許、舟路事なく八丈島より更に又小笠原島へつきにけり。

この地に似氣なうかまへひろき家の中に白髮の老翁と橋本操子宗平の四人宗平まめ〳〵しく茶など茶わんにくみてさし出しぬ。

老翁おだやかに一々のみほして老「よくもわかりしものかな、八丈島にありしむかし、島のものに契りて一子をまふけしはいかにもそなたなるべし、わが素性はよくもしれねど大名の子孫にて、笠野といひし家より、森へ養子に行しものゝ孫にあたるはわれなりとぞきく祖父は罪ならぬ罪に八丈島へうつされ給ひてより、何もしらぬ所の者に讀書の指南などに日をおくり給ひて、笠野の名字に復されたれど、其假名のらんもはゞかりありとてや、立野竹翁となのられき、父はその一子にして同じく讀書など祖父にをしえ導かれ、かたはら漁獵をいとなみ給ひて家眷も多くなりしが我兄即ち汝がをおなる人の代となり、悉皆混費し盡して遂には惡病に身を終り給ひぬわれ母の家に人となり二十四の時はじめて妻をめとり汝をうませしに、折しもこの小笠原島へ日本幕府より手入ありて八丈島より多くの人をうつされつ、其時にわれも身のなりはひなきより妻子をば島にのこし、その募に應じて、こゝにうつりすみ、賜れる畑地を耕して、わづかに生活の見込も立し折から春嶽公とやら、世に出玉ひき幕府の政事も改革あり、とかくに外國人との干係を嫌ひ玉ふとき此地へ出張の役人衆もみな引揚られ移住のものも引拂べきに極まりぬ、われひとりは折角日本の土地として手入ありし此島又々浮浪の外國人共の手に委ねんことの口をしく將わが手にて開墾せし土地を打棄んも心くるしく妻子わするゝとにはあらざれどまた逢ふよしのなきにもあらじと心強くも獨此島に留まりたしと申をし出、役人衆もその志しを感じ玉ひ、公儀にて仕立られし押送り形の船に船具をそへ建つらねたる役所などをもわれにと下し玉はりぬ、洲崎村なる元英人のウエブは、この港の水先承りて公儀よりペツライヲ一艘を玉はり居たれば日頃心やすきより出入相はかりてその二艘の船もて耕作の暇には專ら漁獵を事とせしに、此島にあり來りの丸木船とかはりて沖合遙に乘出すもやすければ母島とも往來しば〳〵して、彼島の地味よ

く植物に適當しつるをもてこゝにも畑地餘多開きぬ、おもへば今は三十四五年にもなりぬべし、しかるに公儀より再び役人を遣はされてわがおもひしに違はず、土地もます／＼繁昌になりて移住の人々も多く交通も自由となり、おつればもとの谷川の水の行末ぞ人の身の上なりける、末には父子再會の瀨はあれど、八丈島にて汝がきしといふに、はじめてしる妻の死去、なく音かなしき雌のセウガクボウにひかれてとられん身をもわすれ、ためにより來る雄もあるものを、人として情しらぬ老が身も又けふのうれしきにもれぬもふしぎの天の配劑、たゞこのうれしさを身一ツにつゝみ餘るもかなしとて烱々としもしたれども光ある眼にうかぶ泪の內またうれしげにこの人々をまもり居たり。

花間尋友圖　米文卿

山氣紅蒸麗彩霞、水光錦漾雨餘花、
何人驢背聽鳴鶴、春鎖雲林處士家。
畫圖煙景惹相思、記得花間尋友時、
繞屋香雲風日靜、停節門外立多時。

統計

東京市結婚離婚屆出數年齡別（明治二十六年中）（統計集誌第五十三號）

足立公忠

女年齡		男年齡 十五年未滿	十五年以上二十年未滿	二十年以上三十年未滿	三十年以上四十年未滿	四十年以上五十年未滿	五十年以上	男合計
十五年未滿	結婚	一	｜	｜	｜	｜	｜	一
〃	離婚	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
十五年以上二十年未滿	結婚	四	八八	三二	四	｜	｜	一二八
〃	離婚	二	三二	九	｜	｜	｜	四三
二十年以上三十年未滿	結婚	二五	一二七三	二二四七	九二	三	｜	三六四〇
〃	離婚	三	一八四	四九八	二八	二	｜	七一五

三十年以上四十年未滿	〃	三	二四八	一三七八	五四九	五一	三	二三三〇
	〃	｜	二七	四三四	二九九	二三	二	七八五
四十年以上五十年未滿	〃	｜	九	二一二	二九六	一五〇	八	六七五
	〃	｜	四	九三	二一九	一五二	一二	四八〇
五十年以上	〃	｜	三	一八	六九	七一	五二	二一三
	〃	｜	｜	八	四八	八六	五一	一九三
女合計	結婚	三三	一六二一	三八八五	一〇一〇	三七五	六三	六八八七
	離婚	五	二三七	一〇四二	五九四	二六三	六五	二二〇六

書架

雜誌一覽

○近松門左は頭をかくべし

依田學海翁が演劇改革論、風生卜濤湧く殆んど當りがたしと云ふべきか。云く、案するに近松なども脚本を作るに當りて僅に其全力の二三分を費やししに過ぎざるべし即はち殊更に下流の裂の腹になりて書きしものゆえ決して上流の者の見るに足るものにあらず……當時の見物の爲に作するは猶ほ馬に秣を食ましむるが如し馬は料理の巧拙を問はず秣は元より調理するの要なし今人が淨瑠璃を評して趣向の巧拙を說くは秣の調理法を是非するが如し間違つた話しなり況んや秣を結搆な御馳走と心得て有難がるは更にわけのわからぬ話なり近來一種の通がりの劇評家新作と改良とをいたくけなして舊演劇をのみ主張し日本の美術はこゝなりなど云ふは笑止至極の說なり斷く强ひて理窟をつけて言はゞ鶏の蹴合ひ犬の嚙合ひも闘法戰法に合へるものと云ふべし（早稻田文學第六十二號）

○小野お通が人となり

淨瑠璃史の作者寺山星川氏、お通が傳を細記し且つ考證して其人となりしを斷定して曰く、

お通は性として雄々しく殆んど一生の間、ひとり立ちて世をわたり文學禮儀の業とへおのれ自から學びて人に貢ふ所ろ無ければ物に堪へしのぶの心深くして幾分かは俠氣めきたる所ありきと覺ゆ。晚年その名上流社會に喧傳してお通を訪ふもの澤なりしも堅く守りて己を屈したると露なきが如し（しがらみ草紙第五十五號）

○社交上の改革者たる森大臣

故森文部大臣の傳を作せんとて熱心に事實を集らるゝ木村匡氏演說の末段に、社交上の改革者としての逸事をあげて、鮫島尙信氏の記念碑を建るに反對して其遺志たる字書編纂の事に賛成し、海防費に義捐せずして五の高等中學に三千圓を寄附し、父の葬送に造花生花を荷車に載て青山に送て仕舞しなどの例を擧て、扨云く先生が木挽町で家を持て居つたときに何處かの貧乏書生が往つて金を惠んで貰ひたひと云ふ事を請ふた所ろが、先生は其書生を導ひて自分の居間に導ひて言ふには、お前に金を唯だやるとは出來ないから門の前の草を取れそうしたならば金を遣らふと云ふたものだから其書生は驚いて金を貰はずに歸つた（教育報知〇四百十八號）

時報

◎學校、教育

◎小學女子科の分立　富山縣下新川郡魚津町明倫高等小學校は此程生徒の增加せしより同町會に於て所屬女學校を設置するとに決し目下其工事中なりと

◎德島縣の女教師　同縣は他府縣に比して女教員の數甚だ尠少にして現に資格あるものは僅かに四十名内外に過ぎざれば其筋にても其養成方を一層注意し來れりと元來同縣の女子は其の教育程度極めて低く偶々學問を爲さしむるものなきにあられど大抵は尋常三年位にして退校せしむるの風ありと云ふ

◎女子教育の計畫　鹿兒島名瀨方戶長麗純則氏は大島に來た女子教育の方法なきを遺憾とし女子教育會を設立せんと目下計畫中にて大海原島司も大に贊成せられしに付き不遠其結果を見るに至るべく當分の間は敎授所は本願寺として創業費等の如きは大島婦人會より補助する筈なりと云ふ

◎東京府教育科圖書審査費　二十六年度追加豫算として去る三十日府知事より全示せられしが其全額は四百十圓にして内二百七十七圓十六錢は市部の支辨に屬し百三十二圓八十四錢は郡部の支辨に屬するものなりといふ

◎高知縣女學生徒の教養　に就て「高知日報」に某女史の寄書あり中に曰く抑文なるものは最も備ふべき性にして苟も女子たるもの此性を欠く時は完全なる婦女と

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

は言ふべからず我が高知縣の婦女子を見よ、我高知縣の婦女子は他府縣の婦女子に比し其文に失するの最も著しき其例證已に近きにありしに非ずや、即彼の些末の事柄に因て口論駁撃遂に一大騒擾を喚起せしに非ずや、其理非曲直は暫く論ぜず是を社會一般の公平なる眼を以て觀れば高知婦人の偏僻心より出でたりと見倣ざる者あらんや、是其誹謗を免れざるのみならず實に我高知縣婦女の偏僻といふきなり此偏僻を矯正せんには主として學校の教授にあり、而して其教養の最大切に最重なるは高等小學校にありとす、如何となれば女子心情の發育時期にして此時期を失せば到底完全なる文質彬々たる女子を造出する能はざればなり、余各府縣に往來して高知婦人の缺失を感發する事既に久し、其缺失たる原因は種々有と雖も須くこれに打勝ち其偏僻を矯正せずんばあるべからず其偏僻を矯正せんか、其矯正は學校の教育にあつて存す、其學校は特に高等小學校に有つて存するなり

●女子の就學と裁縫科　井上文相の教育意見に就きて「教育報知」の紹介する所、詳細を極む中に、女子の就學に關する一言あり曰く、女子の就學男子に比して極めて少なく其半數に居るは我國從來女子教育の習慣に乏しきに依るものゝ如し今女子の就學を奬勵する爲めに小學校に裁縫科を加ふるは稍女兒兒童の就學を增すの結果を得るの實例あり余は此の事に就き目下考案中たり云々

●札幌スミス女學校　同校内には文學會なるものありて毎月第一土曜日夜開會す、又王女會あり毎日曜日午後集會す、又ヘルピングバンドなる會あり是少女の集會なり、同校生徒諸氏は同地會堂新築の爲めに大に盡力し多額の金員を寄附したりと又婦人會ありて毎月二回手工をなし其所得を以て何か寄附せんとて目下計畫中なりといふ(福音新報による)

◎美　談

●アイヌ夫婦の美談　荊棘の中に芝蘭を生じ砂の内にも片玉なきにあらず今を去る十有年前の事かとよ何處如何なる身の上にや氏さへ素生も知られども衣服は名のみ切れ／＼に肌も見へ透く襤褸を纒ひ生れて漸々百日も經つや經たずの赤兒を抱き涙に漾ふ浮草の見る影もなき一人の旅人耳をそがるゝ寒風に齒の根も合ず戰ひつゝ辿り／＼て來かゝりし此處後志の忍路郡忍路の村の山の中立木知られば氣も滅り心も細く行き惱む最も哀れの有樣なり斯る處に一人の土人丈二倍なる柴を背負ひ慣れたる路は峻しさも心易げに來かゝりしが歩み煩らふ旅人の哀れの有樣看過しかねアナ痛ましの旅人どの何處を指して行たまふにや路の案内知りたまはずば下拙導るべして參らせん時候今秋の中旬には候へども名に負ふ北海道の寒氣は堪へがたきに少時我家に憩ひたまへ柴折り焚きて馳走せんと懇切に慰むる人の心の賴しさに引るゝまゝに後につき行が住居なる小屋に至れば妻なる女子も甲斐／＼しく夫婦右より左りより進むる食事は和國人の口には適はねど感涙に掌を合しつゝ繰りかへす感謝の言葉を打ち消して今宵は此處に宿りたまへと一夜の宿を貸したるが縁となり寄邊なき身の旅人を憐れみ聞えて飽まで優しき土人夫婦何から何まで世話しつゝ我村内に住はせて互いに問ひつ問はれつして早くも一歳の星霜を送りける然るに此旅人不圖病魔に犯されて假初めの枕に就きしより遂には重りて衰弱はて賴み少なくなりしかば我も覺悟は極めても心殘りは恩愛の子に引さるゝ煩惱心看病に附き添ふ夫婦の者の面を仰ぎて潸然と涙を流し年月の惠の程舌强りて詫び聞え參らすべうもあらず其万分一報ひも得せで今は本意なくも死別となりぬと云ひつゝ苦しげなる息を洩し海山の高恩も返さず又斯る事願はるべきにはあられど迷ひの種は我子の行末母は産后に身歿りて今又た父を失なはゞ何人を便りに成人せんや賴むは御夫婦養子となして給はらずやと熱涙に咽ぶ親子の情案じたまふな我子として大切に養なふべし左まで力を落さずに能々保養したまへかしと慰むる言葉に安堵して最と嬉しげに笑みしを余波に終に歸らぬ旅に赴きぬ夫婦は遺言を忘れやらず二才の幼子引取りて最と大切に養育むうち憐れや此子も大病に惱み生れも附かぬ背虫の不具とはなりにき夫婦は愈よ不便も加はり又たも七八年も侮りつゝ此子も十歳になりしかば如何で人並々に教育して不具なりとも世の中の人の侮り受けぬやう育て上ずば實親に受けたる賴みの甲斐はなしと夫婦互に談合して忍路村なる小學校へ養子を入學せしめたれども不具の悲しさ山坂の歩行自由ならねば養母は我背に負ひなして學校までの送り迎へに怠たらず一年一日休みなく今尙ほ斯の如しとぞ無智と嘲ける蕃土人にも斯る義人はあるものぞと北州新報による

●筑紫いそ子　岩崎福岡縣知事が此程同縣下巡視の折り同縣御笠郡御笠高等小學に立寄り同校裁縫事業の痛く上達整備せるを賞し同教師筑紫いそ子は大に面目を施したる由なるが同女史は獨り裁縫に巧みなるのみならず音曲を能くし琴に堪能にして殊に賢婦の聞え高し女史は今年六十九歳の高齢にて今より四十餘年前福岡の藩士筑紫某の後妻として始めて筑紫某に嫁せしが夫たる某は居ること數年ならずして遊逝し殘るは前妻の子數人と寡婦たる職女史とのみなりしに女史は尋常の繼母らしき心露程も有たず前妻の子を遇すること主人の如く傍の見る目も最といぢらしかりき嘗て一日のこと同女史の庭先にある一株の柿の實のいと熟せるが秋風に吹き墮せられつついと危くも吊されけるを女史は手をだに觸れざりければ隣軒の何誰訝しきことに思ひ其故を尋ねけるに女史のいふやう別に深き理由のあるにはあらず妾が過の年此の家へ嫁きたるは此の家の主人たる爲めにはあらずして只乳母に代り朝夕の務をも爲さん爲めに外ならず去れば現在我家の嫡男こそ即ち此家の主人にして妾が兼て奉侍すべきものなるに此頃嫡男某は外にありて祇役せり如何で主人たる嫡男の歸へらざる中此の柿の實に手をだに觸るべきやと答へければ問ふ人只管其誠心に感じたりしと爾來二十有餘年女史は一日の如く貞節を守り其品行の如き嘗て一の間然すべき處なく實に近來得安からざる人にぞある其平生の素行の如きは是とて指し示すべき程のものこそなけれ若き時より勤王の志に篤く彼の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

高杉平野氏等の志士が親しく來往し福岡地方の勤王家兼て女丈夫なる贈從五位野村望東刀自の薫陶を享くること淺からず左れば皆一たび國家のこと王事のことに及ぶときは議論風發して有髯の男子も辟易する所ありきといふ女史曾て西陲謫所が姫島海入水のことに關し評して謂ふ大丈夫如何に窮途に彷徨するも辱を忍び垢を含み以て時を待ちて徐ろに再興の事を圖るべし失意落魄の餘り海に投して自ら死せんとする如きは丈夫にあるまじきなり西郷の如き英雄にして念慮の此に及ばざりしは眞に慨歎の至りなり云々と又嘗て車てふ題にて勤王の心を詠せし歌に

古へに引かへされし小車は人の心ぞ綱手なりける　（新朝野新聞）

●貞婦賞を受く　島根縣知夫郡別府村前田定市の妻今木イハは夫に貞節の廉にて島根縣廳より金三圓五十錢賞與されたり

◎片々

●萬國婦人矯風會の遊説員　萬國婦人矯風會より派遣されし第三番目の遊説員マストルオブアーツ、ホヰラー、アンドリユー夫人、ドクトル、アシエチル孃は昨年十一月再び世界週遊の途に就き米國紐育を發し濠洲、南亞弗利加、歐洲大陸、印度、サイアム、支那の諸國を遊説し去月二十二日上海より長崎入港の旅順丸にて着不日神戸を經て沿道遊説着京の筈なりと

海外女報

●矯風會員の遠征　數年以前慈善なるマッサチユセット州の一紳士は二万弗を投じて精工なる黄金の控鈕にて裝飾せる聖書を製して紐育聖書協會の名に依りて世界各國の主宰に寄て、一部宛を贈りたるに帝王中府大統領等は手書を以て深く其厚意を謝したるを全協會にては今尙ほ之を珍藏せるが今や万國基督教徒婦人矯風會員等は之にも増して各國主宰の注意を惹き起すべき一大計畫中にして矯風事業の爲め百名の婦人は九十日間に兩大洋の一週を爲しアルコホル、阿片其他の邪慾を禁遏せんと八百万名の署名せる請願書の寫しを基督教國たると然らざるとを問はず世界各國の君主大統領に呈せんとす之等一百名の婦人は之を以て社會改良の導火となさんとするにありと又某婦人は戯に評して曰我等が放ちたる矯風道德の光燭が地球の各所に起るを見ば天上のギアブリユル仙は地球は火災に罹れりと誤認するならんと万國矯風會は米國よりフランセス、イー、ウーラド英國よりヘンリーソマーセット夫人を撰んで其餘九十八名の婦人を率て各國帝王大統領等を訪問する筈にて遊行用にて地中海を航するカイザーウルヘルム號を借入るゝ都合なり一百名の婦人は來る十月合衆國にて開會せらるべき婦人矯風會年會を畢りたる後特別滊車にて首都に赴き合衆國大統領に謁するを以て第一の着手となし紐育港に艤して一行の首都より全地に着するを待ち受け全月廿四日英國に向て出帆し海上七日の見込にて全國に着し龍動エキスターホールに會する筈なり英國に於ける宗教上或は社會改良の運動は常に此の會堂内に於て開かる今回の運動につき來會する者會議員あり、學者あり、勞働家の領袖、救世軍の將校、新舊猶太各派の宗教家より、禁酒、禁烟、風紀矯正等の諸會員、商業全盟員に至るまで術も現社會の惡弊を洗滌せんとするものは皆な來會すべければ實に空前絶後の盛會なるべく全會を畢りたる後英國女皇及び佛國大統領に謁して請願書を呈し十一月三日西班牙に至り更らに轉じて十一月十五日伊國チーブルスに達し全地より羅馬府に進行して法王レオ十三世及び伊國皇帝ハムバート陛下に謁して請願書を呈し次に希臘アゼンスに至りて國王に謁し次に埃及に赴きてケダイウを訪ひアレキサンドリアよりジアフアに至りジアフアより南東に四十里なるジエルサレムに赴くべし救世主及びダヴヰット王の生地ベスレヘムはジエルサレムを距ること僅かに五哩なれば巾幗遠征者は是非この聖地に至るべしと云ふ其より聖墓ゲッセメーン、國橄欖山等に赴き請願書をジエルサレムの教長に呈し其より印度に赴きラジアーに謁し特に同國内に於て阿片製造を禁ぜんことを請願し次きに暹羅王に謁し次きに清國皇帝に謁して領内に阿片の販賣を禁止せんことを請願し次きに日本に赴きて皇帝に謁見し其より太平洋を經て合衆國に歸り來る都合にて前述以外の東大陸各國は明年南米の各共和國は明後年訪問する筈なり蓋し此の運動は婦人の着手せる事業中絶大のものなるべし　（米國桑港新聞日報）

●千五百の佳人接吻を請ふ　フリッツ及びルイスコサッスに父の葬送に會せんが爲め匈牙利各地より來れる人々の勞を慰せんため招待狀を發し來會せるもの數千人に及びたるにヘル、モーラス、ジヨカイ氏も亦其席に列したり氏は昨日匈牙利下院を代表して葬送の式に臨みて訓導の演説を爲せるに辭々眞心より發し深く來弔者に感動を與へ市中到る所に其演説を稱贊せざる人なきに至れる程なるが一昨日の來會者中五百有餘の婦人を單に演説を稱贊するに留まらず之を事實上に表せんとて氏の身を圍て接吻の榮を得んとを願ひたれば氏は之を諾して一々接吻をなせり氏は多藝多能にして詩人、辯士、小説家、新聞記者、及び愛國者として國人の尊敬する所となる氏はマガイアー郡一郷士の末子にして幼より匈牙利の獨立を企圖し千八百四十八年の獨立戰爭には一身を擲て之に從ひ纔かに死を免かれ其後赦されて力を文學、雜誌に盡し孜々討論によりて顯を得たり氏は三百二十の短篇小説と六篇の劇本を著し其の卷數百六十を超ゆ其の著書は獨り匈牙利人に愛讀せらるゝのみならず兼て獨逸人の稱讃して止まざる所にして數篇の小説は數國の外國語に翻譯せられて廣く世に行れ本年六十九歳なりと云ふ

●瑞典國の女子採用　瑞典國にては從來各電信局に使用する男子を減じて更に女子を用ゆる事とし又郵便局にては集配人を除くの外は一切女子を使用することに決定せりと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

坪谷善四郎君著
●閨秀錦嚢　日本女禮式（密譜入）（第拾版）　全　正價五拾錢　郵税貳錢

坪谷善四郎君著
●家政整理法（第四版）　全　正價拾五錢　郵税八錢

飯島半十郎君著
●家事經濟書（第七版）　全　正價拾貳錢　郵税四錢

文學士濱田健次郎先生校閲　濱本顯義君著
●婦女教育　明治姫鏡　全　正價五拾錢　郵税八錢

陸軍々醫總監松本順君題辭　堀誠太郎君譯
●婦女性理一代鑑（第三版）　全　正價三拾錢　郵税拾錢

醫學士中村正道君著
●小兒養育法　全　正價拾錢　郵税四錢

須永金三郎君著
●婦女手藝法（密圖入）（第三版）　全　正價拾五錢　郵税六錢

第三高等中學校教授　醫學士高橋金一郎君著
●通俗看病法　全　正價拾五錢　郵税六錢

刈城森種太郎君著
●衛生美身術　全　正價拾錢　郵税四錢

賣捌所　女學雜誌社書店

文學界

第十六號　四月三十日發

口なしの花……雪影
月……藤村
しらぬ……殘花
花十五句……酒竹
草堂書影……（其一）
人心の幻境を論す……禿木
花ごもり……一葉
流水日記……孤蝶
音樂學校演奏會……柳村
機聲燈影圖……寧齋
時文
秋堂野史。美術學校展覧會。馬鹿趣高。新刊雜誌。塵影。
一冊六錢、市外六錢五厘

日本女學

編輯者　村木經策　一冊五錢　郵税二錢

新書廣告

書中記する所多くは一度び女學雜誌上に世に公けにしたるものなれども今や時の趨勢に迫まられ更めて梓に上ぼせたるものなり

目錄
各女學校長及び父兄諸君に警告す
女子教育の要旨
教育の流行
眞正の女子教育
英語教育
地方女學校
宣教師派女學校
職業教育
校舍の建築

發賣所　女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小此木信一郎
布川靜淵　同著

俳諧史傳　全

和裝美本
紙數三百二頁
定價三十錢
郵稅四錢

（五月一日發賣）

『俳諧史傳』出でたり、それ俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七有言、尺幅の裡無限の烟波渺々として際なし、俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痛なる正風俳諧の面目を構成す、數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる想念を蕩漾せしめ幽妙なる詩天地に逍遙す、其源流に遡り、其發達を叙し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を論じ、繙讀一番、炳焉として斯文學を腦底に活現せしめむことを期したるは我『俳諧史傳』なり、これを分てば、俳人個々の傳記となり、これを聯れは、整々一卷の史篇をなす、逸事あり、名句あり、一誦の下、恍々乎として、月明かに、花香しき境に遊ぶが如けむ、若しそれ、一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、叙記精確凱切なるや否やは世自ら公論あらむ、世の文士、一本を座右に備へざるべからず、今や印刷成る、我『俳諧史傳』は好知己を待つ者也、

今日に至るまで本書に對する新聞雜誌の批評を擧くれば左の如し

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◉日本人の評　此書は小此木、布川兩氏が平民的文學と稱せらるゝ俳諧の歴史を記述せしものにして、俳諧の淵源より說き起して數派系統、偉人の略傳等及び秀吟の三四を抄掲し、頗る要を得たるの觀あり

◉讀賣新聞の評　近頃俳諧書類の世に出づるもの尠からずと雖も多くは漫錄隨筆の類にして未だ本書の如く史傳として稍完成に近きものあるを見ず先づ俳諧の淵源を討ねて宗祇宗鑑守武一派の俳諧連歌を說き貞德及び其の門下を敍して談林に及び正風に終る一々作者を代表するに足るべき名句を掲出して時に或は之れが評論を試む推移を記し變遷を敍する簡にして明著者の勞思ふべし

◉時事新報の評　この中の數章は嘗つて城南評論に掲げたることあれば世に知而の人多かるべし俳諧の字義起源より筆を起して連歌の四家、貞德門の五星、二客、三人及び檀林派、伊丹派、蕉門の十哲等順序を追ふて系統を正し作例を擧げて變遷を示せり著者才氣充溢して芭蕉其角の名家を敍するや往々文字生動するの妙あり而も引據を重んじて漫に私意を挾ざるは用意の愼密なるを知るべし俳諧の由來を述べたるもの、能く此書に及ぶもののなからん著者を小此木布川の二氏とす

◉都新聞の評　本書は先つ俳諧の起原より說き起して連歌に及ひ俳諧諸派の系統より斯道の大家の傳記及び名吟を批評的に論じたり俳諧は平民的に生れ長じ榮えたるを說き益々其幽玄を極めて韻文に一生面を開かんことを望めり風流の雅人たらざるも一本を備へ置ねば其樂しみや深からむ三十錢の定價廉なりと云ふべし。

◉大日本教育新聞の評　神田表神保町六番地女學雜誌社より發行せしものにて定價三十錢和製の美本なり記する所は俳諧の淵源より以て諸流派の委曲に至るまで載せて遺すなし斯道の爲めに大に氣焰を吐きし斬新妙案の良書なり

◉國民の友の評　小此木、布川二氏の著したる俳諧史傳は考證精確、決して杜撰の書にあらず、二氏の勞謝すべきなり

◉國民新聞の評　俳諧連歌に於ける宗祇、宗長、肖柏、宗鑑、宗武を傳へ、松永貞德の流を汲みたるの徒を傳へ、檀林派の宗因、西鶴、才麿、來山を傳へ、芭蕉及び同門下の十哲を傳へ、遺憾なきに庶幾し

◉毎日新聞の評　俳諧史傳とは俳諧史傳なり、俳諧の字義起源より說き起して、俳諧連歌を記し、松永貞德、檀林派、伊丹派、正風、諸派を擧け、又貞德門の五星、二客、三人及び蕉門の十哲をも示し終りに江戸の俳諧、江戸座、雪門、京都、近江、北陸、美濃、尾張、伊勢等の事を記せり、斯道に嗜みあるの士に取りては亦有益の書なるべし。

◉自由新聞の評　先づ俳諧の淵源俳諧と連歌の關係を論じ次で貞德派檀林派杉田派伊丹派正風派等の名家の傳記及び各派の好尙と流風等を詳かにし次に各地俳諧の變遷盛衰等を記し後に臨んで俳諧を和歌に比較してその平民的なる所自然なる所狹少なる壺中に蟠屈せざる所之に超越することを論じて結論せり要するに趣味ある俳諧歴史變遷を趣味ある著者等の文章によりて敍述詳論せしものなれは此書の趣味饒きは云ふ迄もなし

以て本書が世上に如何に歡迎せられしかを知るに足るべし。

發行所

東京神田區表神保町六番地

女學雜誌社書店

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

毎月一回發兌
五月五日發兌

第二十四號目錄

◉征韓論
◉半島に於ける日清露
◉立正安國論を讀む
宗教上の東方問題(二)
◉懷往事談、新聞紙實歷
◉馬鹿趙高
◉法令全書索引目錄
◉現任安心論
◉基督教界の革新
◉お家騷動
◉薩長政府豈急かに倒れんや
◉道門教
◉錦織剛清
◉本所の大火(江東居士)
◉社會學教授法(布川靜淵)
◉二百年后の吾人を許し併せて元良中島二博士が强者の權利の批評を讀む(靜淵)
◉淚(韻文)雲峯子

自今毎月五日發行と確定せり
(前號の廣告に隔週發行の木版を入れしは印刷所の粗漏に付爰に正誤す)

發賣所 女學雜誌社書店

◉明治女學校生徒募集廣告

本校四月學年終結に付各級へ新入を許す規則所望の人は郵券二錢封入御申越あれ

明治廿七年四月

東京市麹町區下六番町六番地 明治女學校

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

發賣所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日內務省許可
明治廿七年五月十一日印刷
明治廿七年五月十二日發行

發行兼編輯者 東京市麹町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 仝 牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京北豊島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
印刷所 仝 牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工塲(電話十九番)